唐・宋文人の作品に見える道教的なもの

浅野　春二

砂山稔著
赤壁と碧城
――唐宋の文人と道教――

A5判　516頁
汲古書院
［本体 13,000円＋税］

本書は、唐・宋の著名な文人の作品に道教的なものがどのように表れているかを広く探った労作である。本書で取り上げられている主要な文人は、唐の王維・杜甫・沈佺期・宋之問・李白・韓愈・李商隠、宋の欧陽脩・曾鞏・王安石・蘇洵・蘇軾・蘇轍・蘇過・蘇符・蘇籀である。本書のタイトルについては、「あとがき」に次のように説明されている。

本書の標題の「赤壁と碧城」は、蘇軾の「赤壁の賦」と李商隠の「碧城」の詩に基づくが、「碧城」の「碧城十二曲闌干、犀は塵埃を辟け　玉は寒を辟く」の詩句とともに、蘇軾の「念奴嬌」の詞における「大江　東に去り、浪は淘い尽せり　千古の風流人物を／故塁の西辺、人は道う是れ三国周郎の赤壁なりと」の懐古の句も念頭に置く。（四六五頁）

第一部は「唐代の文人と道教」であるが、唐代の道教については、砂山氏はすでに思想史の立場からこれを研究して『隋唐道教思想史研究』（平河出版社、一九九〇年）をまとめている。同書については、砂山氏ご自身が「隋から初唐に亙る道教重玄派の存在を指摘し、茅山派道教に対置して、盛唐の玄宗時代までの道教の展開を考察した」（「はじめに」）と述べているが、第一部はこうした考察を敷衍したものといえるであろう。砂山氏は『隋唐道教思想史研究』第二部の序章において、「士大夫と道教との関わり」についていくつかの考慮すべき点を挙げている。まず津田左右吉氏を引用して「唐代士大夫の道教が神仙思想的側面と老荘道家的側面から構成されていたとする見方」を「分析視角」として「貴重」であるとした上で、「道教の宗教的側面」について考察を深めていく必要を述べる。

そして「当時の士大夫がどのような道教経典を読んでいたか」を検討しなければならないとし、さらに「士大夫と道士の交友について見て行く方法」を提案する。その際に「道教のどの学派、宗派に属する道士と交友関係を持ったかということを押える必要」があるとしている（以上『隋唐道教思想史研究』一六六～一六八頁）。これはまさに本書第一部にまとめられた諸篇を貫く問題意識と方法とについて述べているといえる内容である。『隋唐道教思想史研究』にまとめられた諸篇を執筆している時点で、すでに本書へ繋がる問題意識を砂山氏が抱いていたことを示している。

第一部の序章としては、第一九回国際宗教学宗教史会議世界大会（IAHR）の道教パネルの報告書である『道教研究の最先端』（堀池信夫・砂山稔編、大河書房、二〇〇六年）の「総括」を収め、序章補遺として、遊佐昇氏の『唐代社会と道教』の書評を収めている。砂山氏の唐代道教研究に対する立場が示されているので、これらを序章および序章補遺と位置づけて収録する意図は理解できるが、やはり『隋唐道教思想史研究』第二部序章で述べているような内容を、第一部あるいは本書全体の序章として新たに執筆して欲しかったと思う。そうすれば、一見個別的な興味・関心から執筆されたようにも見える各章が、一貫した問題意識によって記されたものであることが明確になり、本書を読む上で大いに役立ったと思われるからである。

次には第一部の各章について簡単に紹介していきたい。

第一章「桃源・白雲と重玄・本際―王維とモダンな道教―」では、王維の「桃源への憧憬や白雲・白鶴に関わる作品」「老子信仰、道教経典」「重玄」「『本際経』に関する詩文」を取り上げ、検討している。その上で、砂山氏はモダンな道教（重玄派道教）とレトロな道教（茅山派道教）の相克について述べて、「王維はモダンな重玄派道教に共鳴しており、李白はレトロな道教を追及した。李白と王維の両者に接点のある杜甫は、道教においても二つの側面を合わせ持っている」（五一頁）としている。

第二章「太清・太一と桃源・王母―杜甫と道教に関する俯瞰―」では、「桃源郷」「王母信仰」「太一救苦天尊」「太清宮・玄元皇帝廟」を視点に、杜甫と道教との関わりを論じている。その中で、杜甫が「道教重玄派の代表経典である『本際経』を読み、詩文の典故として利用」しているとし、そのことから杜甫の「朝献太清宮賦」の第一段の結びは、玄宗と楊貴妃とを「長楽之舎」に還る元始天尊と「崑崙之丘」に帰る西王母とに見立てたものであるとする（七一頁）。

第三章「『九幽経』小攷―初唐における道教の代表的救済

経典―」は重玄派道教に関わる道教経典の研究であり、第四章「三一と守一―『太平経』を巡る太玄派・重玄派と茅山派との関わりを包摂して―」は、『太平経』解釈をめぐって唐初の「三一」の思想と「守一」の思想とを論じたものである。第二章で述べている内容との関連から『九幽経』についての論考をここに置き、これに続けて、経典をめぐる思想史研究の論考を置いている。内容的には、前著の『隋唐道教思想史研究』に直接繋がるものであるが、文人たちの作品に影響を与えた唐初の道教に関する論考であるので、ここに収めたものであろう。

第五章「道教の色彩学―中国宗教の非言語コミュニケーション―」は、道教に見られる「九色」の枠組みと「玄・黄・紫の三色の尊重」を中心に色彩を論じている。こうした色彩の問題については、李白に関連しては第七章で、李商隠に関連しては第一一章でさらに考察されている。

第六章「仙女と仙媛―沈宋の文学と道教―」は、沈佺期および宋之問と道教とのかかわりを、則天武后晩年の道教信仰、王子晋信仰、七夕の詩、仙女、仙媛をめぐって論じている。

第七章「李白と唐代の道教―レトロとモダンの間―」は、モダンな重玄派道教が流行する盛唐期にあって、李白が「不死を追求する神秘的で実践的な道教を求めていた」（一六六頁）ことを論じている。まず李白の「無常観」と「永遠性への憧れ」（一四八頁）とをとらえた上で、「清真」というキーワードを軸にして道士・李含光との関わり、道士・胡紫陽の「精術」および道士・元丹丘の「談天」へと論を展開していく。そして「色彩学」の観点から「謫仙」と「紫極宮」の問題、および天界に飛翔しようとする時に乗る「黄鶴」を取り上げ、これに続いて、李白の「古風」五九首に見られる道教的世界を探求していく。

第八章「李白女性観初探―共生と相思―」では、李白の作品中に見える「様々な地域の女性」や「宮中の女性」を取り上げて検討した後、女仙の麻姑、西王母、魏華存、女冠（女道士）の焦静真をめぐる問題について論じていく。そして結論部分で「李白は女性描写に巧みな詩人とされるが、それは、無常の世を共に生きるパートナーとしての女性との「相思」を重んずるという個人的な資質と、道教における女性尊重の思想とが相互に影響しあって織り成された彼の女性観に基づくものと思量される」（一八七頁）とする。

第九章「柳文初探―柳宗元と道教―」では、まず柳宗元の黄老・儒・仏に対する考え方を見た後、『荘子』にある「造物者」の語をめぐって柳宗元と蘇軾との思想の共通点を論じる。そして「植物を詠じた詩」を取り上げ、本草学の側から検討す

る。さらに、柳宗元の「東明張先生墓誌」（道士・張因の墓誌）を取り上げて道士との交際について論じ、民間信仰に対する姿勢や「三尸」説の批判についても述べている。

第一〇章「韓愈の死生観と道教―老荘・金丹・神仙・女性観―」では、韓愈の死生観から出発し、金丹を服して死んだ人々を列挙する「故太学博士李君墓誌銘」を検討していく。そして韓愈の「墓誌銘の重視と道教批判を繋ぐもの、それは、人並み外れて『死』に注目する彼の死生観であった」（二二一頁）とする。さらに「桃源図」における「瞿童登仙批判」や「謝自然詩」における「女性神仙批判」を通して、韓愈の道教批判を考察していく。

第一一章「聖女・中元と錦瑟・碧城―李商隠と茅山派道教―」では、李商隠と茅山派道教とのかかわりを、章題に示されているようなキーワードを中心にして検討している。その中で「碧城」の語の典故として挙げられる『太平御覽』所引の『上清経』は、『上清変化七十四方経』であるという指摘をしている（二五四～二五五頁）。

第一部の各章の紹介をできるだけ簡単にするつもりでここまで記してきたが、思った以上に紙数を費やしてしまった。遺憾ながら第二部については、各章の紹介を省略して章題のみを掲げることとする。

第二部「宋代の文人と道教」は「序章」を含めて次の九章からなっている。

序章「宋代道教と雲笈七籤」

第一章「欧陽脩の青詞について―欧陽脩と道教思想―」

第二章「曾鞏と麻姑信仰―麻姑に顔色を妬まるるに似た

種村和史著

詩経解釈学の継承と変容

―北宋詩経学を中心に据えて

従来の枠組みにとらわれずに、詩経学の学的理念と方法の形成と継承の様相を、北宋の詩経学に視点をあてることにより追究する。歴代詩経学の鳥瞰、北宋詩経学の創始と展開、解釈のレトリック、儒教倫理と解釈、宋代詩経学の清朝詩経学に対する影響、の五部構成。　１０５６頁　１５０００円

川合康三・緑川英樹・好川　聡編

韓愈詩訳注　第二冊

韓愈の詩の全作品について解題、訓読、校勘、訳、注を施す。錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』に従って配列。本冊は「八月十五夜贈張功曹」～雄篇「城南聯句」を収録。　１００００円

〈執筆者〉愛甲弘志／浅見洋二／伊﨑孝幸／稲垣裕史／乾源俊／齋藤茂／鈴木達明／谷口高志／谷口匡／中木愛／二宮美那子

既刊　韓愈詩訳注　第一冊　１００００円

研文出版〈税別〉

東京・神田神保町2-7　☎3261-9337

http://www.kenbunshuppan.com/

り―」
第三章「王安石と道教―太一信仰との関わりを中心に―」
第四章「蘇洵の水官詩について―蘇洵と道教―」
第五章「玉皇大帝と宋代道教―蘇軾を中心にして―」
第六章「蘇轍と道教―「服茯苓賦」・『霊宝度人経』・「抱一」・「三清」を中心に―」
第七章「『斜川集』を読む―蘇過と道教―」
第八章「蘇符と蘇籀―道教をめぐる両蘇とその孫―」

第二部も第一部と同様に、それぞれの文人と道教とのかかわりを多角的に論じる。序章では、『大宋天宮宝蔵』の精髄を集めて編纂された張君房の『雲笈七籤』を中心に北宋の道教について述べ、三元思想や黄帝尊重などの問題を扱う。宋代の道教といえば、玉皇大帝の信仰が重要であるが、それについては第五章を中心に取り上げている。

第二部を構成する諸論文の執筆時期は、第一部のそれよりも早い。「士大夫と道教との関わり」についての砂山氏の関心は、まず宋代に向けられたわけであるが、その後唐代に回帰した事情については「はじめに」に記している。

本書は、有名な文人たちの作品を取り上げ、思想史的な方法によってどのような道教が影響を与えているのかについて多角的に論じている。その中で、唐・宋の道教思想史の課題だけではなく、文学研究にかかわる課題も多く示唆されている。ここから唐・宋の道教研究・文学研究がさらに展開していくことが期待される。

（あさの・はるじ　国学院大学）

INFORMATION

講演会「西村天囚関係資料調査報告
―種子島に残る天囚の貴重資料―」

▼講演内容：
湯浅邦弘（大阪大学教授）「種子島西村家資料調査の概要」
竹田健二（島根大学教授）「西村家所蔵資料と懐徳堂―「故西村博士記念会会務報告書」・写真類を中心として―」
▼日時：12月2日（土）13時30分～16時30分
▼場所：大阪大学文学部二階大会議室（大阪府豊中市待兼山町1―5）
▼参加費：五〇〇円（当日受付にて）。懐徳堂記念会会員、大阪大学中国学会賛助会員無料。
▼問合せ先・申込み先：大阪大学中国哲学研究室湯浅邦弘まで
yuasa@let.osaka-u.ac.jp　※申込締切：11月24日（金）